

# Library News

図書館だより

No. 36

Nara National College of Technology

1994年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



平成5年度

## 読書感想文コンクールを終えて

### 図書館委員会

今回で18回目を迎える、夏休み恒例の読書感想文コンクールは、今年応募形式が少し変わりました。1・2年生は従来どおり全員に提出してもらいますが、3～5年生は自由参加という形になりました。応募作品370編の中から、図書館委員会と国語科の先生方が慎重に選考した結果、下記の7名の諸君の作品を入選作と決定しました。氏名を紹介して、その榮譽を称えたいと思います。

- |                              |                          |
|------------------------------|--------------------------|
| 1 E 洞 泰志 「お母さん、ぼくが生まれてごめんさい」 | 1 I 岡本 牧人 「ロウソクの科学」      |
| 1 I 生井 マリ 「天平の薨」             | 2 C 伊藤 道子 「命こそ宝一沖繩反戦の心一」 |
| 2 I 八段 清和 「僕は負けない」           | 2 C 山本 佳苗 「人間失格」         |
| 2 C 喜多 豊 「高校時代」              |                          |

この他に、選考の過程で高い評価を得て、最終選考に残った諸君の作品は次の通りです。氏名を紹介して、その努力を称えたいと思います。

- |                    |                    |
|--------------------|--------------------|
| 1 I 内田 圭 「兎の眼」     | 1 C 大谷 真理 「ビルマの堅琴」 |
| 2 I 米田 伸吾 「銀河鉄道の夜」 | 3 I 山本 豊 「月光の夏」    |

読書感想文、宿題として課されると、実際かなり苦勞する課題である。しかし、一冊の本を読んで、その内容についての自分の考えを読書感想文という一つの作品に結晶させるという作業は、実は、文科系、理科系を問わず、その本質的な意味からして、学習の一番の基礎ではないかと思う。教室で先生の授業を聞き、黒板を書き写すだけが学習ではないのである。自分でテーマを決め、色んな本を読み漁り、自分の考えをまとめるという作業は、社会のどの分野に進もうとも、要求されるものであり、そしてそれが読書感想文という作業そのものなのだと思う。

また、青年期の読書はその人の人格形成に寄与するという側面もある。その意味では、障害者の生き方を通して、生きることの尊さを学ばれた人は、すばらしい読書の時間を過ごされたと思うし、唐招提寺の開祖、鑑真和上の来朝をめぐる話を読まれた人は、中国の唐の時代に思いを巡らせ、すばらしい歴史観や人生観を持たれたと思う。ファラデーの本を読まれた人はローソクの燃焼の中に自然の輪廻を読み取り、科学を学ぶすばらしいincentiveを得られたであろうし、アランの人生を読まれた人は障害者に対する自分の見解の不備に気付くという、すばらしい覚醒の瞬間を持たれたのであろう。他にも、我々の知り得ぬ沖繩の人々の苦しみの実情を知り、目から鱗の落ちた人や、受験生の青年の苦悩を通して、今を精一杯生きることの大切さを学ばれた人や、太宰を読んで人間の二面性を学ばれた人がいた。言葉に表すと何でもないことのように聞こえるかもしれないが、読書は各々の学生諸君にすばらしい覚醒の瞬間と人格形成の契機を与えたと思う。そして、そのような読書こそ本当の意味での読書と言えるのではないだろうか。

次に入選作を紹介します。今年読書感想文を書かなかった人は、来年はぜひ本を読んで自分の考えをまとめるという、快い、そして、為になる経験を味わってみてください。その諸君の成果を今から楽しみに待っています。

(図書館委員 片山悦男)

---

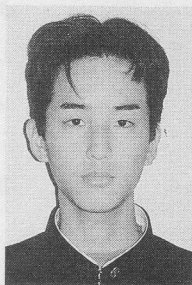
## 目 次

1. 読書感想文コンクールを終えて
  2. 入選作品紹介
  3. '93読書週間の催しについて
  4. ブック・ハンティングを実施して
-

## 入 選 作 品 紹 介

### 「お母さん、ぼくが生まれて ごめんなさい」を読んで

1 E 洞 泰 志



土谷康文君。生まれて直後、脳性マヒの宣告を受け、そして十五年という短い人生を終えた。しかし、康文君は誰よりも強く生きたのではないかと思う。十五年間、精一杯生きたと思う。家族や、養護学校の先生に見守られて、脳性マヒというハンデを負いながらもその生きる姿は立派だったと思う。そんな康文君の人生をつづったこの作品、僕は心をうたれた。

「ふつうの子のように育てたい。」それが、お母さんの、この土谷家の方針だった。いっしょにデパートへ行く。市場へ行く。遊園地へ行く。康文君にとってははすぐうれしいことだったが、お母さんにとっては、世間の冷たい目とたたかわなければならぬ。つらいことだったという。確かにそうかもしれない。障害者の人とほとんどかわりがない人たちは、障害者の人をめずらしがり、変に思い、避けようとする。同じ人間なのに……。お母さんはそう思ったと思うし、僕もそう思うのだ。特別な目で見ると必要はない。同じ地球上に、同じように一つの命を授かり生まれてきたのだから。

康文君は八才の時、明日香養護学校に入学した。学校の先生から名前を呼ばれたとき、全身をハリガネのようにこわばらす。これが康文君の返事だ。僕の出身中学校では、地元の養護学校との交流会があるのだが、そこでも、同じような光景が見られる。何かを表現したいときは、全身で気持ちを表現する。いっしょうけんめい表現する。それが彼らの日常生活なのだ。つまり、精一杯、生きているのだ。「生きる」——僕たちがふだん、並ひととおりにしか感じていないこの言葉の響きが、彼らにとっては、とてつもなく重く聞こえるのかもしれない。そして、生きることの幸せを、彼ら

は一番よく感じているのではないだろうか。と同時に生きることの厳しさも……。

精一杯生きるということは、逆に言えば、生きることが、彼らにとっては大変なことなのである。そして、重度の障害者には、死という現実が割合早くやってくる。十五年……。あまりにも短すぎた。風邪で寝ていたときの事故。寝返りができないがために、鼻と口をふさがれた状態でもどれなくなっただ。みんなに支えられ、強く生きてきた。そして、もっと生きたかったにちがいない。お葬式の日、ある女の子がふとつぶやいた。「命って、自分一人のものと思っていただけ、こんなに大勢のものなのね。」たった一つの命だけれども、決して自分だけのものではない。そこから、命の重さ、尊さということが、生まれてくるのではないだろうか。たった一つしかないから尊いと言えるのかもしれないけど、それだけではないような気がする。

康文君の死後、康文君が生前に作った「ごめんなさいね、おかあさん」の詩がラジオで読まれ、障害者たちのコンサート、わたぼうしコンサートのレコード化、それに、康文君の詩が森昌子さんによって歌われるという、うれしい出来事が続いた。この康文君の詩がどれほど多くの人に感動を与えたことだろう。純粋な心だからこそ、人の心を激しく揺さぶるのだから。

生きたくても生きられない人たちがいる中で、生きていけるのに死を選ぶ人。康文君は天国でどのように思っているのだろうか。

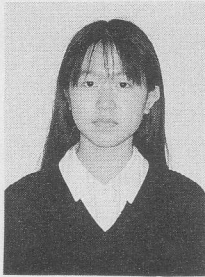
#### 〈 表 紙 〉

平城ニュータウンの南に位置する三号緑地から二号公園の丘にむかって広がる朱雀一丁目・二丁目の街並みをスケッチしました。いまは自分の視覚に感じた自然を素直に表現することを心がけています。精妙な脳の仕組み（下の本が面白い）で感じる映像を一枚の紙に表すことは難しいけれども楽しい仕事です。R. オースティン、R. F. トムソン著「脳ってすごい！」（草思社）

名誉教授 石垣 昭

## 「天平の夢」を読んで

### 11 生井 マリ



人の数だけ、それ相応の意志や思慮があるものだ。——私がこの小説を読んで、最初に実感した事柄である。

そもそも、私がこの小説を読むきっかけとなったのは、自分自身古代に興味をもっており、知識を拓げるうえで以前から気にかけていた一冊だったからである。読み終わった後は、歴史小説でもありまた、哲学的な要素を含んだすばらしいものであると感じた。それは、若い留学僧たちの唐へ来てからの姿に描写されているように思う。

故国日本にどう貢献するべきか？

自分の果たすべき役目は何であるのか？

何が、そこまで彼らを追いつめるのだろうか。国から選ばれたものの使命とでもいうのだろうか。唐へ来て何かを得ようとする無我夢中の僧たちの姿に心をうたれた。彼らの目に映った唐は、政治のしくみであれ、文化であれ、すべてにおいて日本を導く立場にある国だったのではなかろうか。そして、自分の命を惜しみながらも行くべき国だと考えたのではなかろうか。当時の船は航海術も未熟なために、生と死とは紙一重である。たどりつく日を待ちわびて、たどりつけないかもしれないという不安を抱いて、彼らは船に乗っていたのだろう。

また、その大国、唐の何もかもを故国へ持ち帰ることは、不可能に近い。彼らは、そう考えていたに違いない。そして、この大役に気づき、心の中では途方に暮れたこともあっただろう。しかし、彼らは、それぞれ、自分なりの答えを見つけだし、唐での留学僧としての第一歩を踏み出したのだ、と思った。

鑑真来朝という、歴史に残る大きな偉業を成しとげた普照。この時代において、唐に渡った僧のなかで、故国に最も貢献するという形になったのは、おそらく彼であろう。また、自分が幾年か学んでも、学びきれないことに気づき、己の小ささを知ったのも彼である。そして、唐の僧を渡日させるという行為によって、彼の使命は果たされた

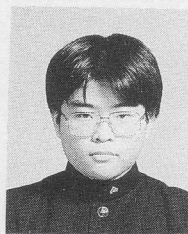
のだと思う。何度も失敗し、試行錯誤ののち、命を共にし、学徳にも名高い鑑真を来朝させたのは偉業であると言うべきだ。何より、来朝する僧は鑑真でなければならなかったのだと思う。他の唐僧ではだめなのである。何度失敗しても、渡日をあきらめないでいた鑑真の信念は相当なものである。どの唐僧を探しても、これに値する人物はいないのではなかろうか。年老いた身体で来朝した高僧鑑真は、人間的にも尊ぶべき存在である。

私は、普照よりも、むしろ一人托鉢僧となり唐を縦横無尽にかけめぐっていた戎融の方が興味深い。彼は誰よりも、自分の意志をつらぬき通したからである。自分の目で果てしない唐の地を訪れ、自分のからだでもって、経典からは学べないものを得たのではないだろうかと思うからだ。そういうことをしてみたいという私自身の冒険心から戎融という人物は、実にうらやましく思う。

天平の時代——振りかえてみることはできても、その時代が躍動していた頃には決してかえれない。どんなことがあったのかは、残された記述を見るほかはない。そこから、おのおのの想像力がものをいうのだ。この小説の著者・井上靖氏の想像力は、歴史のなかでも切実なものだ。過去を単なる過去の世界とはせず、それが今生きている現在の世界と同じようにリアルであり、そこで現実の彼が本当に生きているかのように、想像力を働かせているのである。学ばせていただいたことはたくさんある。歴史についても、そして人間の心についても。人間の心においては、時代はかわっても——と、思わせられた。この書に出会えてよかったというほかはない。

## 「ロウソクの科学」を読んで

### 11 岡本 牧人



電気を消した。そして一本のろうそくに火をつける。そこにまろく明るさが生まれる。すごくきれいだ。うっとりとしてくる。

僕は別にあやしい者ではない。「ロウソクの科学」を読み終えて、とても炎が見たくなったのである。パースデーケーキやクリスマスパーティー

や停電の時などに登場するろうそく。今までにそれくらいにしか関心をよせられていないこのろうそく。しかし、この「ろうそく」をもとにして、そこからこんなに科学的な見方がなされているのである。

まず、ろうそくが、美しく、しかも完全に無駄なく燃えるためには、現在にある最も平凡な形のものがよいということだが、この形になるまで、くり返しくり返しどれだけの修正がなされたことだろう。

ろうそくが燃えるのはあたりまえ。そこに疑問をもたなかった僕。しかし、ファラデーは、このろうそくの燃焼を軸として、物が燃えるという現象を、あらゆる角度から眺め、僕達にはっきりと納得させるため、いろいろな実験をしてくれている。僕はその実験を目の前で実際に眺めているように、何度もうなずいていた。

そして僕は、この本が約百三十年も前に書かれたということにとっても驚いた。そのころ日本では明治維新の時代。日本ではこれだけの実験は、とうてい無理だったろうと思う。

“ろうそくが、空気の一部と結びついて、炭酸ガスを作りながら、熱を出す”という説明があり、そこから、それは、僕たちの体のしくみの中で作られ、はき出される、炭酸ガスの説明へと発展する。僕たちが呼吸する時、吸い込んだ空気中の酸素と血液中の炭素がふれ合い、生きるための燃焼をおこし、そのために僕たちは、まるでろうそくのように、炭酸ガスをはき出しながら、生命を保つためにエネルギーを出し、もの事を考えたりする不思議な体の働きをおこしているというのである。そして更に、「この呼吸によってできた炭酸ガスは、僕たちにとってはもう二度と吸えない有毒なガスであるが、この広い地球上に育っている草木や作物にとっては、生命そのものであり、生命の土台なのだ。」と、解説は進められている。つまり、植物は僕たちがはき出す炭酸ガスを、多量に含む空気から炭素をとりこんで育ち、茂っているというのである。純粋な空気の中では、炭素をとれないので生きてはいけないという。でも、たった一日で、ロンドンの町だけでも市民の呼吸のために五百四十八万トンもの炭酸ガスがつけられるというが、この地球上、人間の生活の場とは遠く離れた山脈あたりの木々は、炭酸ガスがないために成長しないという。

一本のろうそくの燃焼を軸に、六講からなり立つこの「ロウソクの科学」は、この炭酸ガスの正体を僕たちに知らせた後、こう話を結んだのである。

全ての動物も植物も、命あるものは、全て、お互い、助け合って生きていて、自然は、「一方は、他方の役に立つ」という法則で、全体が固く結びつき、みごとに調和が保たれている、と。

そろそろ、ろうそくが燃えつきる。身近な所に科学の世界があることを知らせながら……。

## 「僕は負けない」を読んで

### 21 八段 清和

「僕は負けない」——この本は僕が中学三年の時に買ってきて、読まずに本棚にならべておいた本です。今年は何を読もうかと迷っているときに、本棚にこの本を見つけたので読むことにしました。



主人公のアランは小児麻痺という、まさに悲惨な人生を意味している病気にかかってしまいます。学校に行きはじめたばかりのときにです。以前は馬のように丈夫だった脚も、このときからいうことをきかなくなります。しかしアランは負けなかったのです。車イスや松葉づえを使って学校に通いました。

もちろんアランの友達のアランのことを脚がおかしいとか、背中が曲がっていると言っては遠慮なしに笑いました。そしてアランを障害児として特別扱いする者もいませんでした。走るのが遅いと言ってはごく自然に文句を言ったりしました。そんな子供達とは対照的に大人達は、もし子供がアランのことを笑ったりすると慌ててそれをやめさせるし、アランが元気に振るまっていると、「脚が不自由なのに本当に元気な子ね。」と声をかけます。でもそんな大人達のアランは反感をもちました。僕はなぜアランが大人達に反感をもつのか分かりませんでした。アランの体を見て笑う子供達よりも、アランの体を見て病人らしく扱ってくれる大人達の方がアランのことを理解していると思っていたからです。アランは、「脚が不自由だったら元気に振るまってはいけな

いのか。気持ちだって普通の子と変わらないのだから、生活態度だって当然同じでいいはずだ。脚が不自由なんていうのは子供にとっては問題ではない。大人が気にするだけだ。」と考えていました。僕はこの部分を読んでなるほどと思い、今までの考えが180度ひっくりかえって、大人の方が悪いのではないかと思うようになりました。つまり、子供は脚が不自由なことを意識しないもので、周りの大人が障害となり、アランを障害児にしてしまったのではないのでしょうか。

アランは平凡な「小児麻痺の子」ではありませんでした。それは、次の二つの理由があったからだと思います。まず一つはアランに強い精神力があったということです。アランは何事にも挑戦し、そして最後までやりとげました。絶対不可能だと思っていた水泳や乗馬も根気よく練習、工夫して可能にしました。そんなアランを見て、五体満足でありながら途中で投げ出すことのよくある自分がはかしくなりました。

もう一つの理由は両親や友人のジョー達の思いやりにあると思います。アランの父はアランにこんなことを言いました。

「脚のことは忘れるんだ！走り、闘い、馬に乗れ。そして思い切り叫べ！」

アランはまさにこのとおりに生きました。また、友達のジョーはアランを精一杯励まし、また時には人生の厳しさも教えました。ジョーには僕も教わりました。真の友情とは友のために歩きやすい道をつくることだけでなく、イバラや曲がりくねった道を歩かせるのも必要だということ。

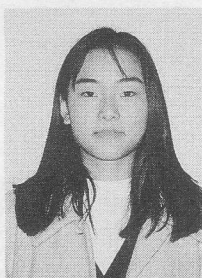
「君は生きているんだぞ。大事なものはそのことだよ。」

僕はこの言葉にとっても感動しました。たとえ足が不自由でも生きている間に精一杯努力し、挑戦することが大切なんです。僕はアランの事を心の中にずっとしまっておいて、人生の障害にぶち当たったときに、「僕は負けない」と叫ぶアランを思い出そうと思います。



## 「命こそ宝一沖縄反戦の心」を読んで

2C 伊藤道子



はじめ、この本を読む時、すごく難しそうで少し抵抗を感じました。しかし、読みはじめると、とてもわかりやすく、丁寧に書かれていて、読みやすい本だとわかりました。字も小さく、量が多そうですが、本文の途中にはいろいろ興味ひかれる写真なども掲載されていて、とても内容の濃い本でした。

この本の主な内容は、今年90歳になる著者が住んでいる沖縄県の伊江島で起こっている土地闘争についての体験談でした。沖縄が日本へ復帰してからも、アメリカと結んでいる安保条約のために、米軍基地があちこちに点在しており、沖縄の人々は自分達の土地を自由に使えないのです。よって、沖縄の人々と、安保条約に縛られている日本政府との間で土地闘争が今も続いている、この本にはそういった戦いによって味わた苦しみとが事細かに書き綴られていました。

私がこの本を読んで驚いた事は日本政府が沖縄の人々に強いてきた卑怯な手段についてでした。安保条約があるため、日本政府はどうしても沖縄の米軍基地を認めなければならず、沖縄の人々を汚ない手を使ってだし、土地を取り上げ続けているのです。私は、この、日本政府が沖縄の人々にしてきた汚ない政策をこの本を読むまで知りませんでしたから、すごく驚きました。平和憲法の名の下で権力を奮っている日本政府が行った政策とは思えないようなひどい政策でした。私にはまだ政治のことはよくわかりませんが、この政策のひどさと、沖縄の人々の悲しみはよくわかりました。私がこの本を読んで、一つ確かに言える事は沖縄が日本に復帰してきたことで必ずしも沖縄の人々が幸せだといえないということです。私は、沖縄が日本に返還され時、ただなんとなく、よかったなと思いましたが、沖縄の人達にとってはなんの状況変化もなかったのかもしれない。とても残念なことです。

そして、私は、文を読み進めていくうちに、こ

の本の著者の健気さに感嘆させられました。どんな卑怯な手段にも屈せず、ただただ自分達の夢の実現と平和の尊さを叫び続けたその勇気にとても感動しました。そして、強い人というのはいくら人のことをいうのだということを実感しました。正しい事と誤ったことを見極め、誤っていることはきちんと筋道を通して、徹底的に正そうとする姿勢はなかなか見られるものではないと思います。本当に偉い人なのだと尊敬しました。

私はこの本を読んで、沖縄にはまだ本当の意味での平和がきていないということに気づきました。憲法では平和宣言をしています米軍基地がこんなに多く存在しているようでは、平和憲法の威厳もうすらいでしまうと思います。日本政府もアメリカの機嫌ばかりをとっていないで、もっともっと国民の事を考えるべきだと思います。そして、国民も無関心を装ってばかりいないで、こういう本を読んで学び、おかしな日本政府は国民の力で倒せなければいけないと思います。理不尽な世の中は国民の手で直していかなければいけません。

沖縄の人々が自分の土地を自由に使い、戦闘機の音に生活をおびやかされることなく暮らせる日はいつになったらくるのでしょうか。これからもこの本の著者—阿波根さんらにがんばってほしいと思います。私も他の著書を読んで勉強しようと思います。

最後に、私は戦争だけがこの世の地獄とはいえないと思います。私達の生活の中にはいじめや差別といった戦争があることも考えねばならないと思います。

この世で最も尊いものは命であると確信しました。

## 「高校時代」を読んで

20 喜多 豊

八月になり、そろそろ読書感想文を書こうと思い図書館へ行った。

図書館は夏休みだけあっていつもより人が多かった。その中には大学をめざして必死に受験勉強をしている高校生もいた…

僕はこのような人たちを見て思った。「自分が

もし高専に入学していなかったら今ごろ何をしていたんだろう。」このような疑問から、「じゃあ今の自分は何を目的にして生きているんだろう。」とか、「他の人から高校時代はどのようにみえるのだろう。」といった現在の時間に対するいろいろな疑問が浮かんだので、この本を読むことにした。

この本の話は、昭和39年、日本でオリンピックが開催された年に大阪の一、二を争う名門校、〇高校に入学を決めた主人公が入学式の日、クラス分けの発表されている前にできている人垣をぼんやりと重苦しい気持ちで眺めているところから始まった。

主人公は真という男子生徒。〇高校にはどちらといえば運よく合格したという感じだった。だから本当は重苦しい気持ちではなくもっと喜んでいてもいいはずだった。しかし、先のことを考えると喜んでばかりいられない状況だった。

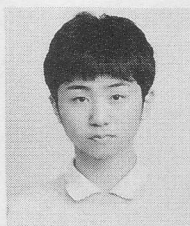
真は昭和23年、終戦直後のベビーブームのまっただなかの時期に生まれていた。したがって、ちょうど真が大学を受験する年が最高の“狭き門”になる年になっていた。さらに、こういうことが新聞や週刊誌にも書きたてられ、中学の教師たちもこのことを口にしてハッパをかけていた。だから、高校に入った途端から、受験勉強にとりくまなければならないようなムードができあがっていた。

このような状況だったため真は喜びきれなかったんだと思う。

しかし、真はこんな状況の中でこんなことを考えていた。「それにしても、いったい何のために、一流大学に入らなければならないのだろうか……。 (中略) 苦労して一流大学に入り、一流企業に就職し、そして、どのような人生を送るというのか……。」

僕は、こんなことを考えている真にすごく親近感を抱いた。自分は立場はちがうけれど、自分も部分的に同じ考えだったからだ。

あるドラマにこのようなセリフがあった。「人生に通過点はない」。受験勉強に必死になっていると、なぜか時間の流れを早く感じ、“人生の通過点”だからしかたないと考えてしまうときがある。実際中三のときにそう思ったときもあった。しかし、時間の流れは一定だ。だから本当はどんな時間も同じように受けとめなければいけないと思った。そう考えると、真は他の生徒とちがいで、高校時代という時間を他の時間と同じように受けとめようとしている気がして、真の考え方に改め



とめようとしている気がして、真の考え方に改めて感心した。

話はその後、真がいろいろな友達と出会い社会問題についても考えるようになり、受験勉強から遠ざかっていき、やがて二年の秋に小説を書くことを決めて学校をやめるところで終わっている。

案外あっさりと言が終わっていたが、この話中の一年半の間に真の考え方は、自分と同等だったのが二回り年上の人の考え方にまで成長したような気がした。

しかし、そんな真のことよりも、真の友達の言った文芸部で文集を作ったときのこのセリフの方がなぜか頭に残った。「十七歳のときには十七歳のときにしか書けへんものがあるはずや。」というセリフだ。自分としては、「今には今しかできないことがある。」とも読めた。こう読むと、最近の自分の時間の使い方がすごくだれているように思え胸が痛かった。これからは、このことをよく頭に置き、一日、一日気を引きしめて過ごしていきたいと思う。

## 「人間失格」を読んで

2C 山本佳苗



「太宰 治」といえば、中学校の教科書にのっていた「走れメロス」しか読んだことがありませんでした。そして、「走れメロス」を読んで思ったことは、「この人はなんて暗いんだろう」ということでした。そして国語の時間がとても嫌だったことを

覚えています。

この夏、なぜ、私が暗くてあまり好きではない太宰の「人間失格」を読もうと思ったかという、ただなんとなく題名が気になったということだけなのです。人間失格。人間を失格になるとどうなるのだろう。そういう簡単な疑問からこの本を読んだのです。本を読んだあともこの疑問はありましたが、読んだあとはすごくいろいろな意味で、この疑問を抱いていました。

この本は、生きる能力を失い、まったく彼の内面とは反対の「おどけ」を演じ、人間・肉親にまでも恐怖を感じ、そして廃人同様に生きていく男を手記の形で書いています。

第一手記は主人公の子供の頃の話から始まります。主人公は幼い頃から人間を恐れ、肉親の考えていることがわからず、そんな気まずさに堪えることができないでいました。そのため主人公は「おどけ」を演じることを知り、一言も本当のことを言えない、子供らしくない、いや、人間らしくない子供になりました。写真を撮るときにはいつも奇妙な笑顔を浮かべるのも、彼の一種の「おどけ」でした。いつも造った笑顔で人を笑わせればいいということをお子に覚えてたのです。

第二手記は、親の元から離れ中学に入学した場面から始まります。自分を知っている人もいなく、自分の生まれ故郷のように「おどけ」を演じる必要もないこの場所でも、彼は「おどけ」を演じます。ここでは彼の「おどけ」もピッタリと身につくようになり、主人公は完璧なピエロになっています。しかし、ここでクラスの目立たない少年に、ピエロの中の自分の素顔を見られるのです。そして、それを皆に言いふらされるのが恐くて、まとも「おどけ」を演じて、少年に近づきます。この時、もう主人公はピエロではなく狂人なのではないでしょうか。ここまで人間を恐怖し、信じることを恐れるのは、異常としか言えません。

彼は、周囲の人間に対し、信じることを求めますが、その度に裏切られるのです。彼は、本当はありのままの自分で生きていきたい、人間らしい人間として生きていきたい、そう思っているのではないのでしょうか。でも、周囲を見回しても、人間らしい人間がいない。そう思えば、主人公が狂人なのではなく、ある意味では周囲の人間が一種の狂人のように思えてきました。

私はいままでも本を読んでここまでいろいろ考えたことがありませんでした。なぜ、この本は私をここまで考えさせたのでしょうか。まず、ひとつは、私もこの廃人同様の主人公と同じく人を信じられなくなる時があるからです。人と話していても心のどこかでその人を疑う、そういうことが自分にもある限り、人からも信じられていない、そう思うと人間が恐ろしくとまではいかないけれど、不思議に思います。そして、もう一つは、この本が手記の形で書かれているからです。この本は、「太宰 治」自身の正体であると、よく書かれています。まるで太宰自身が、私だけに告白しているようなそんな気分させられました。そして、私がたった一人の太宰の親友になったようなそんな錯覚をおこさせるのです。



## '93 読書週間の催しについて

### 「南・東南アジアの国々を知ろう—留学生とその出身国—」

毎年図書委員会では、全国の読書週間にあわせて、10月27日から11月9日まで「読書週間」にふさわしいテーマを選んで、特別企画・展示をしてきました。今年度は、一昨年に続いてもう一度、「留学生」をテーマとして取り上げました。理解の参考になればと、委員会、留学生等の協力で小冊子も作成しました。二度の展示で南・東南アジアの国々への理解も深まったことと思います。

### 「母国バングラディッシュについて」

情報工学科3年 イラム シャザド

私が日本へ来たのは、去年の十月です。母国は、バングラデシュです。世界地図でいうと、インドとミャンマーの間にある小さな国のことです。みどりが多くて、とても美しい国です。季節は日本と違って六つです。一夏、梅雨、秋、晩秋、冬と春。夏は日本とだいたい同じで、冬は日本より暖かいです。冬は果物の多い時季です。梅雨は強い雨で洪水になり、大変です。秋と晩秋と春の時季は、けしきがきれいです。とくに、春のけしきはとってもすばらしくて、春は季節の王様といわれています。

国の経済は、農業に依存している。産業はあまり進んでいません。ジュートの手芸品はとても有名なので、ジュートはゴールデンファイバーといわれています。

全国の人々がしゃべっている言葉を、ベンガル語と言います。ベンガル語と日本語との間には歴史的には関係がないけれども、いろいろと似ているところがあるのは、大変おどろくことです。例でいうと、文の中の言葉の並び方が、ベンガル語は英語と違って日本語と大変似ています。そして、ベンガル語には、日本語の「ちょっと」とか「スリ」とか「ない」とかと同じ意味で同じ発音の言葉があります。

人々の生活とか習慣とかは、日本とはだいぶ違います。90%の人はイスラム教で、豚肉を食べません。そして、お酒も飲みません。食事とか洋服とか……様々な相違点があって、ここでいちいち示すのが大変です。

それでは、この辺で終わらせていただきたいと思います。(以上 小冊子より抜粋)



### 参考図書リスト

- もっと知りたいシリーズ・バングラディッシュ  
タイ  
マレーシア  
インドネシア 弘文社
- 教科書シリーズ・タイ  
マレーシア  
インドネシア 帝国書院
- 世界の子どもたち・タイ  
マレーシア  
インドネシア 偕成社
- カラー百科目でみる世界の国・東南アジア  
南アジア TBSブリタニカ
- アジアはどう変わるか 日本経済新聞社
- 東南アジアを知る事典
- ビジュアル世界再発見・東南アジア・オセアニア  
東アジア・日本 同朋社
- 東南アジアの生活文化入門 日本生産性本部
- 飽食日本とアジア 家の光協会
- アジアを食べる日本のネコ 梨の木舎
- 豊かなアジア貧しい日本 学陽書房
- 豊かさの裏側 //

### 図書館から (お願い)

- ◇ 昨年7月、図書館入口に、ブック・ディテクションシステムを導入しました。快調に作動してますか?ので、くれぐれも貸出し手続きを怠らないようにして下さい。
- ◇ 閲覧席へのカバン・袋物の持ち込みは禁止されています。新しく網目式ロッカーを設置しましたので、必ずそこへ入れるようにして下さい。

## 初めての試み“ブック・ハンティング”を実施して

図書委員会では、今年初めての試みとして、“ブック・ハンティング”を実施しました。参加者は1 M・板坂、1 E・林、1 S・西島、3 S・村井、4 S・中居の5名の図書委員の皆さんです。指定の書店に集まった皆さんは、嬉しそうに、自分の読みたい本や、友達からたのまれた本を捜し回りました。

矢の催促で、大急ぎで受入れ整理しましたが、大好評で、たちまち予約がいっぱいという状況になりました。活字離れとはいいいながら、やはり読みたい本は読むんですね、お陰様で？11月、12月の読書量はウーンとアップしました。因みに、ブック・ハンティングで購入した本のリストは次のとおりです。

もものかんづめ	さくらももこ 集英社
もものしゃべりことば	さくらももこ ニッポン放送出版
たいのおかしら	さくらももこ 集英社
赤ちゃんが来た	石坂 啓 著 朝日新聞社
宗教世界地図	石川 純一著 新潮社
民族世界地図	浅井 信雄 //
なにわのアホちから	中島 らも(編者)講談社
らも嘖	中島 らも 角川書店
らも嘖②	中島 らも 角川書店
イメージの心理学	河合 隼雄 青土社
ヨーロッパの美術館	田辺 徹(文) 向田直幹(写)美術出版社
愛と哀しみのビバリーヒルズ	ブース著、尾島恵子訳 集英社
零戦の真実	坂井 三郎 講談社
速さのちがう時計 花の詩画集	星野 富弘著 偕成社

色えんびつ初級レッスン	視覚デザイン研究所編 視覚デザイン研究所
ペンで描く スケッチから細密描写まで	グプティル著 マール社
手作りのクリスマス・デコレーション	
人気のスピードおかず225品	ブティック社
土方歳三「剣」に生き「談」に殉じた生涯	松永 義弘 PHP研究所
僕に踏まれた町と僕が踏まれた町	中島 らも //
とははのは	中島 らも 双葉社
挑戦!! クイズ王への道(王道編)	7大学クイズ研究会編 池田書店
マイケル・ジョーダン物語	グリーン著 菊谷匡祐訳 集英社
生きるのがラクになる本	高橋 弘二 PHP研究所
テレビのツボ	毎日放送テレビ制作局編 青心社
全国アホ・バカ分布考	松本 修 太田出版
南仏プロヴァンスの木陰から	メイル著 小梨直(訳) 河出書房新社
ガイジンの逆襲	山本徳造、ナティーリ共著 講談社

### 寄贈図書リスト

(書名)	(寄贈者名)
○頭の体操1~13集 多湖輝著	会計課中堅氏
○金属の顕微鏡写真 清原隆徳著	著者
○松の化学(上・下) D.F.Zinkel等著	ハリマ化成
○風の中のめんどりたち 岸川悦子著	奈良県図書館協会
○霧の中の命 大谷貴子著	〃
○生命をください! 遠藤 允著	〃
○空白の事故死 真神 博著	〃
○Mr.Honda Forever	本田技研㈱
○電気化学協会60年史	電気化学会
○国語授業に使えることわざ 阪部 保著	著者
○安堵町史	安 堵 町

(1993.7~1994.1 受入順)

### 編集後記

◇念願だったブック・ハンティングを学生図書委員の皆さんと実施することができました。読みたい本を買える喜びを体じゅうで表わして、みんな生き生きしていました。恒例の行事となるといいですね。

◇三年生以上は自由参加となってしまった第18回読書感想文コンクール。予想通り三年生以上の参加は非常に少なかったけれど、作品は、各々力作揃いでした。次回の健闘を祈ります。

◇3 S村井さん、4 E大植君が、新しく学生図書委員長・副委員長に選ばれました。活躍を期待します。